
君のそばで

ヤンヤン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君のそばで

【Zマーク】

Z3296E

【作者名】

ヤンヤン

【あらすじ】

言葉が届かなくて苦しむ彼と、彼を見つけた彼女の話。あなたの大切な場所は、どこですか。

「こんにちは。

そいつは、いきなり現れた。

そしてさようなら。

部活帰りの薄暗い道。人気のない路地裏で、全身が漆黒に包まれ、
フードを目深に被つたそいつは、僕に別れを告げた。

・・・・えつ。

お腹に衝撃。何が起きたかわからなかつた。触つて確かめたら、手
が血だらけになつた。

刺された。

理解したとたん、全身から冷や汗が噴き出した。

遠ざかる足音。僕を刺したそこは、何事もなかつたように去つていく。

意識を無くす直前に僕が見たのは、見えなくなる直前に振り返った
そのの、いびつに笑った口元だった。

僕の名前は山下明。僕はここで、殺された。

この世に未練たらたらだった僕は、見事に自縛靈になつた。

毎日自分が殺された場所で立つてゐる。どうやらここから離れられな
いようだつた。

足元には、沢山の花束やメッセージが置かれている。

今だに血の跡が残るそこに置かれたそれらは、僕の両親、友達、そ
れに近所の人達が置いてつたものだ。

両手を合わせて、号泣する父さんと母さん。まだ小学生の弟は、実
感がわいてないようだつた。帰り際の、父さんが母さんの肩を抱く
後ろ姿が、妙に小さく見えて、悲しかつた。

クラスの代表で来たのだろう、おさげに眼鏡と、典型的な真面目つ
子な山口さん。クラスの人気者でムードメーカーの樋口。クラス委
員の一人は、花束と、びつしりとメッセージの書かれた色紙を持つ
てきた。

声を押し殺して泣く山口さんと、下を向いて下唇を噛んでる樋口。
色紙を置く前に、樋口は大声でメッセージを読んでくれた。震える
その声は、僕の胸奥深くまで響いた。

一番の大人数で來たのは、サッカー部の奴らだつた。

背番号七番。僕のユニフォームにも、メッセージが書かれていた。
スパイクも一緒に置かれたけど、僕はもう笛とサッカーが出来ない
ことを思い、寂しくなつた。

沢山の人が來た。先生、近所のおばさんや、たまに遊んでやつた子
供たち、知らない人だつて來た。

『前にいるよ。目の前にいるよ』

僕の声は、誰にも届かなかつた。

僕が死んで一週間がたつた。

色んな人が来たけれど、一番気になる人物が来てないのが、僕は気になつっていた。

藤堂桜。僕の幼なじみであり、僕の好きな人。幼稚園の時からずっと同じクラスで、彼女を見るだけで僕は元気になれた。

来てはくれないのだろうか。

もつ話すことは出来ないだろしけど、僕は彼女に会いたかつた。

次の日、彼女が来た。両親に連れられて。

そしてこの日、僕は死んだことを一番後悔した。

いつも笑っていた彼女。僕と付き合ってるんじゃないかと冷やかされて、真っ赤になつて怒つていた彼女。サッカーの試合で、いつも応援に来てくれた彼女。一緒に帰ろう、と恥ずかしそうに僕に言った彼女。

そして、僕の殺された場所で、泣き崩れる彼女。

その初めて見る姿に、僕の胸はたまらなく締め付けられた。

僕はここにいる。ここにいるの。-

こんなに近くに居るのに、泣いて肩を震わす彼女に、寄り添うこと出来ない。

せめて、君が気付いてくれなくて。

僕は彼女が帰るまで、震える小さな肩をぎゅっと抱きしめていた。

誰だ、僕たちの幸せを奪ったのは。

彼女の笑顔を奪ったのは誰だ。

僕の胸に、憎しみの炎が点ひるのを感じた。

その日から、僕の心は、僕を殺した犯人への憎悪で満たされていった。

そして、彼女がその日の出来事を報告しに来てくれる、その時だけが、僕の心が休まる時間だった。

そして、その日はやつてきた。

いつものように、僕の前で報告をする彼女。僕もいつものように、彼女の前に座つて話を聞いていた。

気づくと、いつのまにか彼女の後ろに一人の男が立っていた。男は彼女に聞いた。ここで誰か死んだのですか、と。

はい、と彼女は答えた。好きだった人が死んだのだと。

僕は照れ臭くてにやけてしまった。

その男も笑っていた。

それを見た瞬間、背筋に電撃が流れたかと思った。

そのいびつな笑い、忘れるはずがない。

生前に見た最後の光景が蘇る。

さくらがその男に背中を向けた。

そして・・・。

僕は彼女の隣で泣き崩れていた。

血が止まらない。横たわった彼女の下に、血で出来た水溜まりが広がっていく。

彼女の顔から、血の気が引いていくのがわかった。

なぜ、なぜ、なぜ。

何故彼女がこんな目に合わなくちゃいけないのか。

僕は彼女に必死に話し掛けた。

さくら！ 死ないでくれ！

彼女の瞳が少しだけ開いた。明らかに目が合つ。

あきらめ、やつぱりそこで居たんだね。

弱々しく喋る彼女。震える唇は紫になっていた。

最後の力を振り絞るように微笑むと、彼女は言った。

私も、そっちに行つて、いいかな。

そんなこと言うなー サベリは生きててほしい。生きていんさベリが
見たいんだ！

僕は願った。彼女が助かるよつこと。幸せに笑う彼女をまた見たい
と。

ふと、身体が吸い込まれるような感覚がした。見れば、彼女の中に
僕が入つていくではないか。

僕は夢中で念じた。

死ぬな、と。

必死で彼女の名前を呼び続けた。

そして、僕の意識は光に包まれた。

一人の女性が、夕焼けが照らす川沿いの堤防に立っていた。

彼女は、昔好きだった彼のことを思い出していた。

ここは、思い出の場所。彼はよく、トレーニングだと黙つてここを走っていた。

同じような夕焼け空の下、よく一人並んで下校した。

この堤防に一本だけ生えている、大きな桜の木。一人が小さい時は、よくこの木の下で遊んだ。

彼はこの木の下で、桜の花が好きだと言つた。元気をわけてくれるらしい。私も、あなたが好きだよ。この一言は言えなかつた。

彼はよく笑う人だった。

まるで向日葵ひまわりが咲いたような、そんな笑顔。

彼と居ると、自然と元気になれる、そんな人。

彼のおかげで、私は今生きている。

そう彼女は思つてゐる。

彼女の背中には、古傷がある。

黄、通り魔に刺された跡だ。

この傷が作られた時、彼女は死ねると思つた。そうすれば、彼と同じ世界に行ける、そう思つたのだ。

でも、彼はそれを拒んだ。

朦朧とした意識の中、彼女は確かに彼の声を聞いたのだ。

凍えるように寒かつた体が、温かくて優しいぬくもりに包まれたのを感じたのだ。

生きる、と彼が必死に励ましてくれたから、彼女は生きることを諦めなかつた。

そして今、彼女はここに居る。

大好きだつたんだよ。

そう言葉を残して、彼女はこの場を後にした。

風が吹いた。

堤防の上、彼女がさつきまで居た場所。そこに、一人の少年がいた。

彼は空を見上げる。日は沈み、満点の星空が広がっている。

突然、彼の体が宙に浮かんだ。

しだいに高度を上げ、彼は町を見下ろした。

さよなら。

彼はそつそつと、更なる高みへと上っていく。

どんどん加速して、彼は光の速さを超えた。

広大な宇宙の果てに、小さな光が見える。

あそこに向かおう。そして、もう一度生まれよう。

僕の大好きな、彼女の笑顔はなが咲く場所で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3296e/>

君のそばで

2010年10月10日03時59分発行